

道 標 (白山を眺めながら)

黒木克史[†] (石川県獣医師会・くろき動物病院院長)

「人生は登山と一緒にですよ。」—故藤原公策先生の遺影の写真が、私の診察室の壁にかけてあるのだが、この原稿の投稿を依頼されて、はて何を書いたらよいのかと思いい悩んでいると、写真が私に語りかけてきた。昔、先生がよく口にした言葉である。

藤原先生は東京大学を定年退職後、日本大学に移り、授業にじっくりと集中しようと思っていたのだが、先生の部屋に押しかけ強引に第2病理学研究室を作っただけ、無理やり側においていただいた。ご迷惑だったかもしれないが、その後、私と同じように先生を慕う研究室の学生も増え、賑やかになり、案外よいことをしたのではないかと思えるようになった。先生と一緒に食事に行くと、有鉤条虫の話、先生のライフワークであったティザー病の研究、東大の病理学研究室で狂犬病の犬の剖検をした時の恐怖体験談や、本当かどうか怪しいが、脳を味噌汁の具にした話など楽しく聞かせてくれた。こんな話題が他の一般の食事の方の耳に届かなかったことを祈っている。

先生は「病理学をやっていると病気にならないで健康でいるほうが不思議なことに思える」ともおっしゃっていた。臨床をやっていると、本当にそのとおりでと思うし、また、動物の免疫力、回復力という不思議な力に助けられることもしばしばである。また先生は「その考え方は面白い。それは何の役に立つのか」ということを考えるようにと教えられた。研究論文を書いて持っていくと、赤ペンで校正されてかえってくる。原稿を直し、再び持っていくと、また戻ってきてはまた直し、6～7回はかかる。よく見ると、部分的には最初に出した原稿の文に戻っているところもあったりして、先生のいないところで同級生と苦笑いした。仕事に対してはそういう細かい一面もあったが、私のような箸にも棒にもかからないような学生に対して、熱心に指導し励ましてくれたことは、有難いことであった。

藤原先生のおっしゃった「人生は登山」という格言は、私が学生時代は「とにかくコツコツやりなさい。」ということだと解釈していたのだが、今はそれだけではないと考えるようになった。例えば登山では、情報を多

く集めること。新しい道具や装備に目を向けること。自分の力量を知り余裕をもって予定を立てること。予定外のことが起こったときも対処できるように準備を怠らないこと。ちょっとした変化にも気がつくこと。道に迷ったときはあせって下に下りずに尾根に上って自分の位置を確かめること。下山時は登るときよりも危険が多く最後まで気を抜かないこと。登っている間は苦しいが、頂上に立ったときの達成感があり、また行きたくなること—など人生や仕事と通じることが多くある。

私もご多分に漏れず、仕事柄、長い休みをとって遠くに登山や旅行に行くことが難しい。そのため憧れもあり、登山を題材にした文学や旅行の紀行文が好きである。私の登山や旅行の経験の半分以上は本の中の世界で得たことである。ここ20年ほど、ハイテクやバーチャルが流行ってきて、コンピューターや携帯端末が全盛の時代になったが、これからはその反動で、自然の中に身を置く、ローテクでリアルなことに興味を持つ人が増えるのではないだろうかと予期している。私の出身地、石川県加賀市は、「日本百名山」の著者、深田久弥の出身地であり、晴れていれば1年の半分は白い山、白山が美しく輝いているのが見える。時代を超えて、深田久弥と同じ山を同じ場所から見ていると思うと感慨深い。その他の山岳文学の中では、新田次郎著の「孤高の人」(新潮文庫)はお薦めである。主人公の加藤文太郎は、人に対して不器用で無口であるため、周りから誤解されやすく孤独な性格なのだが、超人的な体力があり、登山に対する執着心が強い。彼をよく思わない人も多い中、外山

黒木克史

—略 歴—

1991年 日本大学農獣医学部卒業
同 年 動物病院勤務
1994年 くろき動物病院開院
2009年 社石川県獣医師会開業部
会長



[†] 連絡責任者：黒木克史 (くろき動物病院)

〒922-0423 加賀市作見町へ4-1 ☎0761-72-8211 FAX 0761-72-7758 E-mail: kuroki.new-01@nsknet.or.jp

三郎など彼のよき理解者が現れ、彼は仕事もソコソコなし、休みに好きな山に行くことができるようになるのだが…というお話である。私もまた、この外山三郎のように私のことを見るに見かねたいろいろな私の周りの人たちから励まされたり、指導されながら、導かれてきたのだなと、自分と主人公を重ねながらこの本を読んだ。藤原先生の他にも、代診時代の院長、獣医師会の方々、家族や友人、私に影響を与えて下さった方々にはとても感謝している。

さて、私は、これから獣医師として、どのような山に登るのだろうか。私にはいろいろ思うところがあり、ペットの診療だけをやっていくことに疑問や矛盾を感じる時がある。日本獣医師会の獣医学術学会年次大会など三学会合同企画などに参加する機会があると、できるだ

け小動物臨床だけでなく、他分野の企画や市民公開講座の会場に潜り込むようにしている。防疫、学校飼育動物、動物介在療法、動物適正飼育、環境保護、生物多様性の維持などなど多くのテーマがあって、それぞれの分野で多くの獣医師が活躍されている様子を見ると刺激を受けるし、エールを送りたくなる。人は多くの動物の命の恩恵を受けて生きていることを大人や子どもたちに伝えたり、人間や動物や環境を守る上記のことなど、自分の専門外の分野を勉強したり活動することは大事なことだと思う。今後も、日本獣医師会及び地方獣医師会には、公益法人認定の如何にとらわれず、組織として意欲的に使命感をもって、このような取り組みやボランティア活動が円滑にできるよう、継続的にバックアップしていただくことを期待したい。